

「少し休まうぢやないか？」

二人は地上に放り出された長い材木へ腰を下した。古い樫の木で、その枝は手斧の當る日を待つてゐるやうであつた。其處は暖かであつた。青白い反射がきら／＼して、どこことなく薫が匂つて、爽かな心持がした。

「なんて佳いでせう！……」女はぐつたりと男の肩へ靠れて、その頸のうちに接吻する場所を探しながら言つた。男はやゝ身を退つて女の手を執つた。と、男の顔色が急に険しくなつたので、彼女はぞつとした。

「何よ？ 何ですよう？」

「いやな事をいふのさ……わたしの代りに行つたあのエドキンがねえ……」彼は自分も驚くやうな皺嗔聲で言ひにくさうに語つた。が、前以て準備した物語の終りへゆくほど段々強くなつた……エドキンは任地へ着くと病氣になつたので、彼はその代りに行くべく役所の命を受けた……本當の事を言ふよりはこの方がよほど樂で且つ残酷でないやうな氣がした……灰色に蒼ざめた顔をして、眼をすゑて、女はしまひまで遮らずに聞いてゐたが、「いつ發つのか？」と手を引込めながら訊いた。

「今晚……今夜……」と彼は上ずつた苦しげな聲で言ひ足した。「わたしは二十四時間カストレエへ寄り、それからマルセイユで乗船しようと思ふ……」

——澤山よ、嘘仰しやい。」彼女はすつくと立上り、凄じい勢ひで絶叫した。

「もう仰しやるなよ、わからないの！……本當はあなたが結婚なさるんさ……お家で勸めてるのは久しいもんよ……皆さんは、何かあなたがチブスカ黄熱病でも探しにゆくやうにあたしが思つて、それで止めたり邪魔したりしやしないかと心配なさつてるのだ……たうとうまあ、皆さんも御満足でせうよ……そのお嬢さんはきつとあなたのお氣に召すわ……木曜日にあなたへ結んであげた頭巾の事を思ふと！……随分あたしは馬鹿げてゐたでせう？ えゝ？」

女は口を歪めて、横の方に隙間を見せながら、痛々しい猛烈な笑ひかたで笑つた。その隙間はあれほど得意であつた眞珠のやうに美しい齒の一つが缺けて出来たものだが、彼がまだ見なかつたところから考へると、疑ひもなく最近に缺けたものであらう。そして瘦せて取り亂した土氣色の面のこの缺けた齒がジャンには恐ろしい苦痛であつた。

「まあ、わたしの言ふ事をお聞き、」彼は再び女の手を執つて、無理に側へかけさせた……「そりやなるほど、わたしは結婚する……父はさうしたがつてゐるのだ、御承知の通りね。だが、わたしの出てゆかなけりやならんのがお前にはどうだといふのだい？……」

女は怒りつゞけてゐたくて、身を引離した。

「あなたが森の中を一里もあたしを引つ張りまはしたのは、たゞその事をあたしに言ふ爲めなのよ……あなたはかう思つたのさ。女がいくら泣いたつて、誰にもきこえまい……ところが、御覽なさい……わめきもしなければ涙もこぼさないわ。あたしはね、あなたのお美しいところをお先へたつぷり御

馳走になつたのよ……行つたつてかまふもんですか。あなたを呼びかへすやうなあたしぢやありません……奥さんと御一緒に、お家で呼びなれていらつしやるその『可愛いひと』と、島へでもどこへでも行つしやい……お綺麗でせうさ、その可愛いのは……ゴリラのやうな御面相でね、でなきや、とび出した御姫姫になつてさ……さういふお方をあなたに宛かつて下さつた方々と御同様、あなたもやつぱりお人好しですからね。」

彼女はもう我慢しきれず、罵詈謗を浴びせかけて、しまひには拳でも見せて喧嘩をしかけるやうに、「卑怯者……嘘つき……臆病者……」などいふ言葉を男の鼻の下へ吐きちらすまでになつた。

物も言はず、止める氣もせず、今度はジャンがきく番であつた。彼は寧ろ女をさうさせて置く方を好んだ。破廉恥で無智で、いかにもルグラン親爺の娘らしかつたから。別れたところが大きく残酷でもなからう……彼女はその氣持を知つたのか？ 俄かに黙つて、頭と胸とを前方へ突き出し、體中を震はして咽びあげながら、戀人の膝へ倒れた。そしてその駈り泣きから時々歎き聲が洩れた。「御免なさい、宥して……あたしはあなたが好きです。他の人はいや……あなたや、あなたや、そんな事はしないで……あなたはあたしがどうなつたらいいの？」

この激情は彼を壓倒した……あゝ、彼が恐れてゐたのはこれであつた……涙は女から男に移つた。溢るゝ涙を忪へる爲めに彼は頭を後ろへ仰向けた。で、甘い言葉で女を宥めながら、幾度もこの分りきつた事を言つた。「が、わたしは出發しなけりやならんから……」

女は立上つて、泣きながら、自分の希望を悉くさらけ出した。

「ねえ、行かないで頂戴よ……あたしはあなたにかう言ひたいの。お待ちなさい、いつまでも戀をなさいまし……あたしがあなたを愛したやうに、あなたは二度と女に愛されるものと思つてらつしやるの？……あなたはいつでも結婚が出来ます。まだそんなに若いんですもの……あたしは、あたしはぢきに年寄りになつてしまひます……もう役に立たなくなれば、その時には二人は自然に別れてしまひます。」

彼は立上らうと思つた。勇を鼓して、もう何をしても駄目だと言つてやりたかつた。けれども、女は男に吊り下つて、この小さい谷の窪地に残つた泥潭の中へ膝をついたまゝ身を曳きずりながら、彼をもとの場所に還さうと努めた。そして彼の前で、その脚の處へ、唇の呼吸をかけ、淫らな色眼を投げ、子供らしい媚を捧げ、硬くなつた男の顔へべたりと手を當て、その髪の中へその口の中へ指先を突つ込みながら、彼女は二人の戀の冷えきつた灰爐をかき起さうと試みて、過去の快樂、力なき起床、日曜の午後の恍惚した抱擁など、さういふ事を低い聲でくどくどと男に繰返した。又それ位ゐの事は、今後彼女が男に捧げようとしてゐる事とは、比較にならないものばかりであらう。女はまだそのさまざまな接吻や、いろ／＼な歡樂を知つてゐた。彼女はその事について男の爲めに新しい工夫を凝らすであらう……

恰も曖昧屋の戸口で聞くやうな、かういふ言葉を囁きながら、彼女は悲痛と恐怖とを浮べた顔の上

に大きな涙をぼろ／＼と流し、身を戦かして、夢のやうな聲で叫んだ。「あゝ、そんな事にはならないやうにね……あなたがあたしを棄てるなんて、本當ぢやないと言つて頂戴……」それから尙ほ啜り泣くやら、顫へるやら、助けを呼ぶやら、まるで短刀でも持つて迫り来る男を見るやうであつた。

死刑執行人はその犠牲者と同じく大膽ではなかつた。彼は女の憤怒よりも寧ろその媚態を恐れた。そしてこの絶望、この泣き聲をどうする事も出来なかつた。その泣き聲は森に籠つて、瘴氣の立つ、死のやうな水面へ消えて行つた。そこには悲しげな太陽が赤く傾いてゐた……彼は女の苦悶を察してはゐたけれど、これほどの痛切さとは考へなかつた。たゞ、男の胸に生れ初めた、あの新しい戀の眩惑があるばかりで、今この女を抱き起して、「では、行かないことにしたよ、お黙り、行かないことにしたから……」と弱音を出さずに耐へてゐられたのである。

二人はいつまでかうやつてゐるつもりなのであらう？ 太陽はたゞ西方へだん／＼にその光線を收めてゆくばかりであつた。池は石盤のやうな鼠色に染められた。そしてその不健康な蒸發氣が、恰も向ひあふ丘の荒蕪地や林へ侵入するものゝやうであつた。彼は二人を引き包む物影の中で、たゞ盡きぬ歎きにかきくれないながら口をあけたまゝ自分の方へ擡げた青白い顔ばかり見た。やゝ暫くすると夜が來て泣き聲は静まつた。と、川のやうに流るゝ涙の音が引續いて起つた。それはかのおどろ／＼しい嵐と共に降るやうな大雨の一つであつた。又、時々、或る恐ろしい物に怯えるやうな、深い、掠れた、「あれ……」といふ聲もした。その恐ろしい物は女がいくら追つても／＼再び見えた。

やがて、もう何もなくなつた。その音もやみ、その獸もなくなつた……冷たい北風が起り、葉摺れがして、遙かに時の鐘が反響する。

「さあ、お出で、そんな處にゐないで。」

男は徐かに女を起す。と、子供のやうに柔順な、太息を洩らすたびに、びく／＼する、なよ／＼とした女の體を感じる。女はいかにも剛健な男に對して畏怖と尊敬とを表するらしい。彼女は男と並んで、歩調をそろへ、腕を與へず、おづ／＼歩く。地面の黄ろい反射を辿つてよろ／＼とわびしげに小徑をゆくこの二人の姿を見ると、野面の長い労働に疲れて立ちかへる夫婦の百姓のやうに、人は思ふに違ひない。

森のはづれに燈光が見える。オシユルンの開けた戸口が見える。男二人の動かない横向きの姿が照されて立つ。「ジャン君かね？」と、訊き質すエッテマの聲がして、衛兵と一緒に近寄る。彼等は二人が歸るのも見ないし、又森を横切つて悲鳴などがきこえたので、不安になりはじめた。オシユルンは今や小銃をとつて、二人を探しにゆくところであつた……

「お二人様、今晚は……娘が肩掛を嬉しがつとります……寢床へまで持つてゆかなくては承知せんで……」

二人打連れての最後の行動は、この慈善であつた。この小さな瀕死の體の周圍で、彼等の手はそれを最終として結ばれたのである。

「さよなら、さよなら、オシユコルンさん。」と、彼等は三人連れで家の方へ急ぐ。エッテマは頻りに彼の森に籠つた叫びを氣にする。「高くなつたり低くなつたりしてな、まるで獸でも刺し殺されてゐるやうでした……が、あなた方は何もお聞きにならないでしたかな？」

二人とも答へない。

パゼ・デ・ガルドの角で、ジャンは躊躇する。

「御飯を上つてらつしやいよ……」と、彼女は哀願するやうに言ふ……「汽車は出てしまつたわ……九時ので行つしやいよ。」

彼は二人と共に家へ入る。何が怖いものか？ あゝいふ活劇は二度とは繰返さぬ。又少しは女に慰めを與へる事にもなる。

食堂は暖かい。ランプは明るい。通を横切る人々の蹠音を聞きつけた女中は、食卓へソップを運ぶ。

「たうとう來ましたね！……」と、もう坐つて、短い顎の下へ布片を引き上げたオラムプが言ふ。

彼女はソップ容器をあけると、俄かに手をやめて叫んだ。

「まあ、お前さん……」

憔悴して、十歳も年をとつて、眼瞼が膨れて血走つて、上衣から髪まで泥だらけになつて、恰も警官に追はれて逃げて來た女のやうに動顛して取り亂した姿、これはファンニイである。彼女は一寸息をつく。その燃ゆるやうな憐れな眼が燈火にしばたゞく。と、だん／＼にその小さな家の温氣や陽氣に食

物を盛つたテーブルなどが樂しかつた日の記憶を唆かし、新たに涙を喚び起す。その涙からかういふ言葉が洩れる。

「この人はあたしを捨てるの……この人は結婚するの……」

エッテマとその妻と給仕の女中は、互ひに顔を見合せて、ジャンを視る。「とにかく食べませう。」と大きな人がむつ／＼として言ふ。それから貪る匙の音とファンニイの顔を洗つてゐる隣りの寢室の水を流す音とが入れちがふ。羊毛の白い化粧着を着て、すつかり青白く白粉を塗つて、彼女が立歸ると、エッテマ夫婦は或る新しい破裂を豫想して心配さうに偷み視たが、その様子にひどく驚いてゐる。彼女は物も言はず恰も難船した人のやうにが／＼皿へ飛びつき、パンやキャベツや珠鶏の翼や林檎など、手當り放題の物で、その嘆きの空洞やその涙の深淵を埋めるのだ。食べる。食べる。盛んに食べる……

最初はお互ひに窮屈さうに話す。やがて追々自由になる。で、エッテマとの話は平凡な物質的の、麥粉で糖煎菓を製する法とか、寢るには羽よりも毛の方が宜しいとかいふやうな事ばかりだから、故障もなく珈琲に達する。その珈琲へ肥つた夫婦は食卓に肘をつきながら徐ろに味つては少量の焼砂糖を加へる。

この重たい秣槽と藪藁の友が互ひに交換する、善良な信實な且つ穩かな眼付を見てゐるのは愉快だ。彼等は立ち去りたくないのである。ジャンはこの眼付にふと氣がつく。と、隅々へいろんな記念や習慣の籠つた親しい食堂で、疲勞や消化や安逸が襲ひかゝつて來て彼を癱痺させてしまふ。と見て取つて、

ファンニイは椅子を近よせ、脚をくゞらせ、自分の腕を男の腕の下へすべり込ませる。

「お聞き、」と彼はきつぱり言ふ……「九時だ……早速だが、さよなら……手紙をあげる……」

彼は立上つて、外へ出る。往來を横切り、通路の柵門をあける爲めに暗闇をさくると、二つの腕が彼の全身をひしと抱きしめる。

「せめて、接吻して……」

彼は、開いた化粧着の下で女の裸身に捉へられて感ずる、女の肌の薫りやその暖かさが滲みとほる。別れの接吻が亂れかゝつて、口中へ熱と涙との味ひを残す。女は男が折れてくるのを氣取りながら、小聲で、「もう一晩ね……たつた一晩よ……」

線路の上に信號が見える……汽車だ……葉の落ちた枝越しに照燈が輝いてゐた停車場まで、彼はどうして身を脱れて飛んでゆく事が出来たのであらう？ 客車の隅で息を切らしながら、出入口を通して燈がついた小家の窓を見やりながら、彼はまだ自分で驚いてゐた。と、柵の傍に白い形……「さよなら！ さよなら！……」その邊りで死にはせぬかと、夢想した場所に女が見えたので、線路の曲り角で感じた無言の恐怖を、この叫びが一層強くした。

頭を外へ出して、彼は地面の伸びぢぢみする中に彼等の小家が隠れたり小さくなつたり回轉したりするのを見た。その燈光はもう星のちら／＼するほどになつた。忽ち彼は或る歡喜を感じた。非常な慰安を感じた。いかに自由に彼は呼吸したかよ！ 遙かに三角形をなして無数の光を、一直線に流れ

てゐるセエヌ河の方へ閃めかしつゝ、彼のムエドンの全谿谷と、彼の黒い大丘陵とはいかに美しかつたかよ！ イレエヌはかしこで彼を待つてゐた。彼は列車の全速度で、あらゆる戀の願望を抱いて、潔白な若き生涯へ向ふべくあらゆる念力を胸にして、イレエヌの方へ行くのであつた……

バリ！……彼は馬車を呼びとめてブンドオム廣街までゆくやうに命じた。が、瓦斯の下で氣がつくと、着物も靴も泥だらけになつてゐた。この重たい厚い泥はまだ重苦しく穢らはしく彼に付き纏つてゐる過去の名残りであつた。「さうだ！ 今夜は止さう……」そこで彼はジャコブ通の昔の宿へ入つた。その宿では、セゼエルが自分の室の隣りへ、彼の爲めに一室をとつて置いてくれた。

一三

翌日、セゼエルはシャギイルへ行つて、甥の道具や書物を取戻し、移轉によつて手切れ話を纏めるといふ、意氣な役目を委任されたが、ジャンが愚かな吉なさま／＼な臆測に苦しみはじめた頃、非常に遅くなつて立戻つた。やがて棺車のやうに重さうな二階附の貸馬車がジャコブ通りの角を曲つた。それに積んだ麻絲でからげた數多の箱や大きな旅行行李は自分の物だとジャンにわかつた。と、叔父は神祕的な惱ましげな顔をして入つて來た。

「また行かんやうにと思つて、一度に残らず集めてしまふので長くなつたよ……」

で、二人の小僧が寢室へ並べた包みを見せながら、「これが襦袢と着物だ。それが書類と本だ……た

だお前の手紙だけがない。それを読み返してお前の事をいろ／＼思ひ出したから、それだけは残して置いてくれと頼むのだ……別に害もなからうとおれは思うた……何といふ善良な娘だらう……」

彼は旅行李へ腰かけて、布片のやうに大きな生絹のハンケチで額を拭ひながら長く息を吹いた。ジャンは女がどういふ風であつたかなど、細かい事は訊きもしなかつた。叔父も彼を悲しませてはと心配して何も言はなかつた。そして二人は、この口へ出せぬ事ばかりな、照れくさい沈黙をば昨日以來俄かに天氣が變つて寒くなつた事や、製造場の煙突、鑄鐵の圓筒、野菜園藝家の貯藏所などがついついと立つ、赤裸々なものわびしい巴里郊外の悲しげな光景やらを話して補つた。ところがたうとう、終になつて、

「彼女はわたしに何も言傳をしませんでしたかね、叔父さん？」

「いや……安心せい……あれはお前の邪魔はせん、あれはな、十分に覺悟して又十分に見識を保つてあきらめて居つたやうだよ……」この數語の中には、女の手酷しい侮蔑と誹謗が含まれてゐるやうに、なぜジャンは取つたのであるか？

「そりや同じだ、お互ひの義務だよ。」と叔父は續けて、「わしはあの不運な女子の絶望を見てゐるよ、ラ・モルナに引つ搔かれた方がよほどまじだつたと思つたよ。」

「彼女はひどく泣きましたか？」

「そりやもう、お前……随分痛々しく泣いたて。わしも我慢が出来ず、彼女に面と向うて、つい

貫ひ泣きをしてしまつた……」と彼は年老つた山羊のやうに頭を振りながら、鼻息を立て、その心持を消さうとした。「とに角止むを得ん。こりやお前の過ちぢやない……お前はあそこで一生暮らすわけにはゆかんのだからな……萬事非常に好都合だつたよ。お前は彼女に金もやるし、道具の一つもやるし……これで先づ色戀のかたがついたから早速結婚の方へ懸るがい……が、その問題はわしにはちと荷が勝ちすぎるて……その事は領事殿が取り計らるゝだらう……わしはたゞ道でない方の口を片づけるだけの役目だ……」と、急に惱ましげな顔になり、顔を硝子窓の方へ向け、屋根と屋根との間に、僅に見えてゐる低い空を見成りながら、

「萬事がさうだ。世間が濕つぽくなつたよ……わし等の時代にはな、そりやもつと面白をかしく別れたものだつたつけ。」

セゼエルが例の引き揚げ機械のことで立去つてからは、その快活な話の多いさえ／＼した氣分を失つて、ジャンは一週間を過ぎるのが長くて／＼、空虚と孤獨とを身にしみ／＼感じ、鰥暮しの見當が皆目つかなくなつた。さうした場合には、よし悔恨の情はないにせよ、人は自分と同様な運命のものを求めるが、それは、得られないものである。食卓や寢臺を共にした二人生活が目に見えぬ織やかな絲筋の織物を創り出して、その丈夫さ加減はたゞ縦びる時の悲しさ辛さでばかり知らるゝものだからである。接觸と習慣との影響は驚くほど滲みとほるもので、同一の生活をする二箇の生物をばいつのまにかお互ひに似通はしてしまふやうになる。

サフオの五年間はまださういふ點まで彼を造り上げることは出来なかつた。が、彼の體には重い鎖に引き摺られた印痕は残つてゐた。そして屢々彼の足は役所を出ると、ひとりでにシャギールの方へ向いた。同様に彼は水脈のやうに重い、櫛を脱した黒髪をば、朝枕邊に探すやうになつた。彼の最初の接吻はその黒髪の上に落ちたのであつた。

宿屋の寢室では夕暮が殊に際限のないものゝやうに思はれた。その寢室は彼に二人の關係の最初の頃を憶ひ出させた。優しい、口數の少い女が目の前にゐたことや、その女の小さな名刺が、寢所の薫香と『ファンニイ・ルグラン』といふ底の知れぬ名前とで大鏡を匂はしたことも、偲ばせた。そこで彼は出歩いては、單に身を疲らして見たり、散歩したり何處か小さな劇場に入り込んで、其處で唱はれる折返句やら燈光やらで氣をかへたりしてゐた。やがて時が来て、老ブシュロオは一週に三晩だけは許嫁のそばで過してもいゝといふ許可を彼に與へた。

たうとう成立した。イレエヌは彼を愛した。イレエヌの所謂 uncle もそれを希つた。式は講義の終りなる四月上旬になるであらう。冬の三ヶ月間はお互ひに會つたり、理解したり、戀しがつたりして、魂を結びつける最初の流眄やら、どきまぎする最初の告白やらを、うつとりとなつて語りあふのである。

婚約の夕、家へ歸ると少しも睡たくなないので、ジャンは彼の我々の生活を我々の觀念に一致させる自然的の本能によつて、自分の寢室を手際よく整頓して見たくなる心持を経験した。彼はテーブルや

急拵への荷篋の底に積み重ねたまゝまだ紐を解かなかつた書籍などを並べ立てた。その書籍は法典類で、ハンケチの一堆と庭着の短表衣との間に在つた。特に屢々繕いた商法辭書の少し開いてゐるところから、その時、封筒のない一通の手紙が落ちた、それは情婦の字であつた。

ファンニイはセゼルのあまり無雜作な同情を疑ひ、この方が確かに届くだらうと思つて、その手紙を後々の勉強する際の機會に託した譯であつた。彼は最初開けまいと決めた。

けれどもいかにも穩かな、いかにも譯のわかつた初めの文句に折れてしまつた。そしてその煩悶は僅かにペン先の顫へと行の不揃ひとで感じられた。彼女はたゞ男に時々歸つてくれといふ一事ばかり願つた。その外は何も言はなかつた。何も咎めなかつた。結婚の事も言はなければ、又絶對的に決定してしまつたのを知つてゐるので、別離の事も言はなかつた。が、たゞ會ひたい！……

『これは妾にとりては恐しき打撃と存候。誠に思ひがけなき不意の打撃に候……妾は何だか人の亡くなりたる後か火事の跡のやうな心地にて、どうして宜しきか途方にくれ申候。妾はたゞ泣き居候。ただ待ち望み居候。たゞ幸福の跡ばかり眺め居候。貴方より外には妾をこの新しき境涯に慣らし得るものはなかるべく候……お慈悲に候。會ひに来て下さい。妾をこんなに寂しがらせないで下さい……妾は自分が恐しく相成候……』

かういふ悲歎や、かういふ哀求の聲が、手紙の全面に迸つて、幾たびも、『會ひに来て、會ひに来て……』と同じ言葉を繰返した。彼は恰も林間の空地で、ファンニイが足のところにゐて、涙に汚れて力

なく彼の方へ向けた不惑なその顔や、泣く影を隈取つて開いた口などが、董巴の夕べの名残りに包まれて見えるやうな気がした。夜もすがら彼に附纏つて、その睡りを惱ましたのはこれである。かしこから持ち歸つたあの幸福な夢心地ではないのだ。あの戀の告白がその目の下へ薔薇色の小さな焰を染め出した花盛りの石竹のやうに清浄な輪郭の顔をば、一生懸命に自分と女との間へ置かうとしたが、どうしても見えて来るのは、この年老つた色褪せた顔である。

この手紙は日附から八日経つてゐた。その八日間は不運な女が彼の一言を待つてゐたのだ。或は一度訪れてもらひたいと思つてゐたのだ。そして自分の求めた諦めをば勵ましてもらひたかつたのだ。が、どうして彼女はそれ以來二度と手紙をよこさなかつたのか？ 恐らく病氣でもしてゐたのであらう。と、昔の恐怖が再び彼の心に起つて來た。彼はエッテマに會つたらいろんな事が聞かれるだらうと思ひ、その几帳面な習慣を心當てにして、砲兵院の前で彼を待ち受けに行つた。

サン・トオマ・ダンタンで、十時の鐘が鳴り終ると、大きな男が小さな辻の角を、襟を褰しあげて、煙管を啣へて、指先を暖める爲めに両手でその煙管を掴みながら、曲つて來た。ジャンは遠くから來る彼を見て、さまざまの事を想ひ出して非常に心を掻き亂された。が、エッテマは殆んど、れくさい氣分もほのめかさずに彼を受けた。「や、あなた！……この週間わたし等はどんなにあなたを呪つたかわかりませぬ！……平和に暮らすつもりで田舎へ行つたわたし等ですからね……」

そして入口で一服喫ひをはつて、彼は先の日曜日に、丁度その日が、あの子供の外出日に當つてゐ

たから、子供と一緒にファンニイを彼等の家へ招待して、いやな思ひを少しでも忘れさせようとした話をした。彼等は歡びを盡して食事をした。食後、彼女は歌なども少しばかり唄つてきかせた。それから十時頃お互ひに別れて、二人は楽しく寢床へ入らうとした時、忽ち戸を叩く音がして、動顛するばかりに小ジョセフの聲が叫ぶのだ。「早く來て。お母さんが毒を飲まうとしてゐる……」エッテマは飛んでゆき、女の手から無理に阿片の罎を奪つた。彼は取組みあつて、腕でその體を抑へつけ、女を支へて、頭や櫛を打つ突けられないやうに防禦しなければならなかつた。打つ突けられたら彼の顔は滅茶苦茶になつてしまつたらう。格闘の最中に罎が碎れて、方々へ阿片が散り、着物が毒で汚れたり腐蝕したりした。

「ねえ、あなた、三面記事のやうなかういふ活劇は平和な人間には向きませんよ……まあ、それは濟みましたが、わたしは言つて置きました、來月引越しをするね……」彼は煙管を箱へ納めて、穩かに挨拶して、ぼんやり聞いてゐたジャンを後へ残して、小さな前栽の低い弓門の蔭へ消えた。

彼は二人の寢室であつた部屋の活劇や、救を呼ぶ子供や、大男との野蠻な格闘などを胸に浮べた。そして散つた阿片の睡氣を催すやうな一種の苦味を感じるやうに覺えた。この驚きは終日彼の心に残り、女の孤立になる事がますます氣になつた。エッテマが去つたら、今度は誰が女を留めるであらう？ すると、手紙が一通來たので、彼はやゝ安心した。ファンニイは思つたほど男が無情でない事を謝した。この棄てられた不惑な女にまだ幾分か興味を持つてゐてくれたので。「お聞きになつたでせう？

……あたしは死なうと思ひました……あんまり寂しくてたまらなかつたからなのでした！……あたしはやつて見ました。が、出来ませんでした。人に止められました。あたしの手が多分震へたものでせう……苦しむのや、醜くなるのが恐くて……あゝ、あの若いドオレさんはどうしてやる氣が出たのでせう？……失敗つて恥かしいとは思ひましたが、又かうやつてあなたへ手紙が書け、遠くからあなたを愛し、いつかお目に懸れる事もあるだらうと思ふと、却つて嬉しくもなりました。あたしはあなたが不幸の友とか喪中の家とかへ同情して、たゞ／＼同情して、お出でになるやうに、一度は来て下さるであらうといふ望みを失はないのでございます。』

それ以來シャギルから二日目三日目毎に長いや短いのや悲しい日記のやうなものや、その時その時の通信が來た。彼はそれを突きかへす氣にはならなかつたばかりか、その優しい心のうちに戀ではない同情の念がだん／＼増して行つた。情婦に對してといふよりは、寧ろ自分の爲めに苦しむつゝある一個の人間へ對するやうに。

或る日、隣人の移轉があつた。彼等は自分の過ぎ去つた幸福の證人なので、さまざまな事を彼女に思ひ出させた。今や二人の記念としては、たゞ道具類と、二人の小家の壁と、それから籠の隅で悲しげに毛を亂しながら寒さに慄へてゐる高麗鷲と同様、物事に殆ど頓着しない、野生の女中ばかりであつた。又或る日、蒼白い光線が心持よく硝子窓から入ると、何だか、今日はあの人が來るであらう！ といふやうな氣がしたので、彼女は目をさましたながら嬉しがつた……さつそく家の中を美しく飾り立て、

日曜衣を着て、男が好くやうに髪を結つて、艶な女になりすました。で、夕方まで、日が沈みきるまで、彼女は食堂の窓で列車を數へた。パエ・デ・ガルドを通る人の足音をきゝすました……女は氣がちがはねばならなかつたのだらうか？

時には、『雨が降つてゐます。暗くなります……あたしはたつた一人で泣いてゐます……』とたゞ一行より書いてない手紙もよこした。或はまた封筒の底へ彼等の小庭に咲き残つて霜に凍てた憐れな花を入れたゞけの事もあつた。雪の下から掻き集めたこの花はあらゆる悲歎にも勝つて多や孤獨や絶望を物語つた。彼は小徑のはづれのその場所を見た。土手に向つて縁まで濡れた女の裾着が往つたり來たり淋しく散歩する姿を見た。

この同情に惱まされて、彼は別れてしまつたに拘らず、いつまでもファンニイと一緒に暮らしてゐた。彼は始終、女の事を考へた。その姿を心に描いた。が、一寸記憶が薄くなつたばかりで、まだ五六週間より別れてから經たぬけれども、又家の中の細かい事は、村の祭で買った木製の杜鵑と向ひあふラ・パリュウの籠から、風が少し吹いても、化粧室の硝子をうつ榛の枝まで、まだ目の前にあつたけれども、女の姿ばかりはもうはつきりとは見えて來なかつた。たゞ興奮した悲しげな顔やら、歪んだ口やら、笑ふ度に見える缺けた齒などが、霧に包まれながら遠のいてゆくやうだつた。

あんな風に年老つて、彼女はどうなつてゆくのであらう。長い間共寢をしたあの憐れな者が？ 残した金がなくなつたら、彼女はどこへゆくであらう、どこまで零落するであらう？ 忽ち彼の記憶の

うちへ、或る晩、英吉利酒屋で遇つた淺ましい賣女の、鮭の燻肉へ向ひながら、死ぬほど喉を濡かしてゐた姿が浮んで來た。彼女はあゝした姿になるのであらう、あれほど長い間眞心こめて忠實に温情を與へ世話をしてくれた者が。と考へると彼は暗然となつた……が、どうしよう？ 不幸にもこの女と出逢つて、暫く同棲したといふことがあるばかりに、永久にこの女を守りつゞけ、自分の幸福を犠牲にしなければならなかつたか？ どうしてそんな理窟があらう？

どう考へても再び會ふわけにはゆかないので、彼は女に手紙を書いた。そしてそのわざとらしい斷乎した無情な手紙には諒すやうな宥めるやうな忠告の蔭へ自分の眞情を籠めた。彼はジョセフを寄宿から退けて、家へ連れ歸り、その世話をして氣を變へるやうに女に勧めた。けれども、ファンニイはことわつた。何の必要があつて煩悶したり失望したりしてゐる面前へ子供など連れて來よう？ それは日曜日だけで澤山であつた。日曜日にはその子供が椅子から椅子へうろつき廻つたり、食堂から庭へさまよひ歩いたりしては、何か大きな不幸が來てその家を悲しくさせてゐる事に氣がついてゐた。そして彼女が啜り泣きをしながら、彼が出て行つてしまつて、再び還らぬのだといふ話をしてから、『ジャンの父さん』について、子供はもう何も聞かうとはしなかつた。

「おいらの父さんはみんな行つてしまふんだ！」

この棄鉢な子供の一言は悲痛な手紙の上に落ちて、ジャンの心に重苦しく残つた。と、女がシャギールにゐるのだと考へると、心苦しうたまらなくなつたので、彼は女に巴里へ歸つて、世間に出る

方がいゝと忠告した。いろ／＼な男やさま／＼の別離については悲しい經驗があるので、ファンニイは男のこの忠告のうちにと驚くべき利己主義を見た。自分を尼のやうにして置いて、男は永久に自分から身を免れようとしてゐるのだと感じた。で、眞正直に辯明した。

「妾が昔貴方へ申し上げたる事御存じに候はむ……何事に拘らず、妾は貴方の妻に候、忠實なる愛すべき妻に候。妾達の小さき家は貴方と申すお方もて妾を包み居候。妾は世の何物にかへても此家は見棄てまじく候……巴里へ參りて何を致し申すべき？ そこには貴方を引離すべき妾の忌はしき過去有之候。貴方は妾達をば何物の前に押し出さんとするお考へにや……貴方はそれほどお強きお方に候や……お出で下さい……たつた一度きりでようございます……」

彼は行かなかつた。が、或る日曜日の午後、彼が一人で勉強してゐると、二度かすかに戸口を敲く音を聞いた。それは昔と同様なそ／＼とした訪ひ方だつたので彼は身慄ひした。彼女は下で番人にでも遇ひはせぬかと恐れながら、何も訊ねずに一息で昇つてしまつた。彼は近寄つて毛氈の中へ身を沈め、敷居越しの氣息をきいた。

「ジャンさんですか？……」

あゝ！ その氣兼ねした悲しげな聲……もう一度、やゝ高く、「ジャンさん！」それから歎息が洩れて、手紙が一通かさこそとすべり込み、情を含んだ別れの接吻も響いた。

一歩づゝそろ／＼と梯子段を降りてゆく様子は、恰も呼び返してくれるのを期待してゐるやうであ

つた。ジャンは單に手紙を拾ひ上げて開けて見た。その朝人々はオシコロンの小娘を病兒救濟院へ連れて行つたのである。彼女は父親とシャギルの、二三の人々と一緒に來た。そして彼に會ふか或は前以て認めたこの手紙を残すかして訪れないわけにはゆかなかつた。

『……幾度も申し上げし通り……妾が若し巴里で暮らすとせば、貴方のお傍より外にゆくところはござなく候……さよなら、貴方や、妾は家へ歸ります……』

彼は讀みながら涙で眼を曇らせ、ラルカド通の同じ光景を想ひ出した。追ひかへされた戀人の悲嘆、戸口へすべり込ました手紙、心なきファンニイの高笑ひ。彼女は彼がイレエヌを愛してゐるよりも一層彼を愛してゐた！ 或は男といふものは生活と事務との戦ひが女に比べて複雑なので、女のやうに戀に全心を傾けたり、その純一な専らな情と關係のない一切を冷然として忘却したりするわけにはゆかぬのであるか？

この苦悶や、この心弱く、なまじ同情などすることが彼を惱まして、イレエヌの側へでも行かなければ心が静まらなかつた。そこへ行きさへすれば煩悶は解けた、彼女の碧い柔かな眼の光に解けた。彼はたゞ非常な倦怠を感じて、その肩の上に頭を置き、物も言はず身動きもせず、その隠家にちつとしてゐたくなつた。

「どうなすつたの？」と彼女が言つた……「あなた、幸福ぢやなくて？」

然り、甚だ幸福である。が、なぜその幸福がかく無限の涙と愁ひとから造らるゝのか？ 彼は時々

利發な善良な女友達にでも對するやうに、何もかも打明けてしまひたかつたに違ひない。憐れなる狂人よ。さうした打明話はたゞ初心な少女を動搖させるばかりだといふ事を思はぬのか。又さういふ事は却つて或る感動を與へて、癒しがたい創を蒙らすものだとは氣がつかぬのか。あゝ！ 彼は彼女を連れて一緒に逃げて行きたかつた！ さうすればこの苦悶が斷てるであらうと思つた。けれども、老ブシコロオは定めた時期を一刻も猶豫することを好まなかつた。「わしは年とつとる。それに病氣ぢや……もう直きにこの子を見る事も出来なくならう。死が近いのぢやから不承して下さい……」

険しい顔はしてゐるが、この偉人は最も善良な人であつた。無残にも心臓病に呪はれてゐる身を以て、自らその病勢の進むのを研究しつゝ、彼は驚くべき落ち着いた態度でその事を話した、そして咽びながら講義を續けたり、自分よりは軽い病人を診察したりした。この偉大なる精神のうちにも唯一つの弱點があつた。いかにもツウランゴオの百姓出らしい弱點で、肩書のある人や貴族を尊敬する一事であつた。カストレエの小樓塔の記憶や、ダルマンデイといふ由緒ある古い名などは、容易にジャンを自分の姪の配偶として承認した事に關係がないでもなかつた。

結婚は紳士的に行はるゝであらう。さうすれば、毎週未來の嫁へ向けて、デイダンスか或はベタニイの娘の一人に書かした優しい手紙を送り越す憐れな母親を、不愉快がらせずにすむであらう。又イレエヌと共に自分の親戚の事を話したり、ワンドム廣街へカストレエを再現させたりしよう。すべて愛する花嫁の周圍へ集る一切の愛情が彼にとっては滴るやうな歡喜であつた。

が、自分にはもう面白くななくなつてしまつた事や、既に経験してしまつた同棲の楽しさなどを、彼女が子供のやうに嬉しがるのを見ると、何だか自分が非常に年を老つたやうで、彼女の面前にゐるのが退屈でたまらなくなる事ばかりは、自分ながら恐ろしかつた。そんな中にも、領事館へ送らなければならぬ一切の物を書附けるといふ楽しみもあつた。が或る晩、道具類とか贈物類とかを書附けてゐる最中、ペンが滯つたので書きやめた。それはアムステルダム通の舊居を思ひ出させられるのが恐かつたからである。又五年も夫婦らしく一人の女と暮らしたそのさまじく幸福を、偲ばずにはゐられなくなつたからである。

一四

「さうですよ、君、今晚ロオザの腕に抱かれて死にました……わたしはそれを剝製屋へ持つて行つて来たのです。」

ジャンがデュ・バク通の或る商店から出て来ると出會した音楽家ド・ポッテは、事務家らしい平然たる無情な外貌に似合はず、何もかもぶちまけたいといふ態度で、彼に取りついた。そして憐れなるピシトオの殉難を物語つた。二ヶ月以來その小さな寢所の下で、綿褥だ、アルコオル燈だと、まるで月足らずの赤兒を育てるやうな騒ぎをしたに拘らず、寒氣に萎びて、巴里の冬の爲めに殺されてしまつた。何物もその顛へを止めることは出来なかつた。前の晩、人々がその周囲を取巻いてゐた時、最後の戦慄

が頭から尾までぶる／＼と動くと、彼は聖水の滴に感謝しながら、善良なる基督教徒の如くにして死んだ。そして、粒々立つた皮膚が生氣を失つて、色の變る羊毛布のやうに、三稜鏡の運動のやうに凋んで行つた時、母親のピラアは眼を天に向けて、「神よ彼を恕させ給へ。」と言ひながら泣いた。

「わたしはそれを見て笑つたのです。が、同時に胸が一杯になつたのです。泣くまゝにさせた憐れなロオザの悲歎を思ふと殊にね……幸ひファンニイがその側にゐました……」

——ファンニイが？

——さうですよ。わたし共は久しく彼女を見ませんでしたかね……丁度今朝、あの悲劇の最中に來たんです。そして自分の友達を慰める爲めに居残つたんです。自分の話がどういふ印象を與へたか氣もつかずに彼は言ひ足した。「手を切つたですか？ 君はもう一緒にゐないでせう？……アンジャン湖でお互ひに話した事を想ひ出すでせう？ わたしの言つた事は少くとも君の爲めになつてゐるのです……」と、ジャンはそれに賛成しながらも、その中に幾らか嫉妬心を混へてゐることを、彼は見てとつた。ジャンは額に髪積をよせて、ファンニイがロオザのところへ還つたと思ふと、不快で何ともたまらない感じがした。が、とにかくもう彼女の生涯には權利も責任もないわけだから、そんな氣の弱い感じを起したことが自分ながら淺ましかつた。

二人が今足を踏み入れたのは、巴里の、昔貴族的であつた非常に古い町だが、そのボオヌ通の或る家の前でド・ポッテが立止つた。そこは、彼が住んでゐたところである。或は便宜の爲めに住んでゐると

看做されたところである。といふのは彼は、實際にいつもギイリエ街かアンジャンにはかりゐたからである。彼の妻子があまり棄鉢になつてしまはぬやうに、たゞそれを防ぐ爲めにのみ、彼は時たま、その結婚上の家庭へ姿を現はすばかりであつたからである。

ジャンは心の中で別れの言葉を考へながら歩き續けてゐると、相手はピアノの鍵盤など叩き壊してしまひさうな硬く長い両手で彼の手を握りしめて、どんな悪事でも平氣でやれる人間らしく、一向に臆面もなく、

「一寸頼まれて戴きたいのですがね……どうか一緒に昇つて下さい。わたしはけふ家内のところで食事をする筈になつてゐるんですが、どうもあの不惑な口オザを一人ぼつちで失望させては置けんです……あなたね、わたしの出てゆく口實になつて下さらんでせうか。さうすると面倒くさい辯明などしないですむのです。」

音楽者の書齋は第二階の冷たい高雅な中流階級らしい部屋にあつたが、仕事もせずに放り出されてゐるといつた趣があつた。そこにある物は悉く清潔すぎて、少しも取り散らしたところがなく、従つて品物や道具類に、活氣らしいものが何にもなかつた。机の上には一冊の書物も一枚の紙片もなく、たゞ乾いて光る大きな青銅の墨汁壺がどこかの店先にでもあるやうに傲然と幅を利かしてゐた。昔、作曲の興を湧かしたエビネット形の古風なピアノに、譜紙一枚さへないのだ。又白い大理石の胸像が一つ、それは溫和な表情をした、花車な顔立の、若い女の胸像だが、夕日に映じて非常に蒼白く見える

ので、火のない幕張りもない爐棚を、一層冷たく思はせた。又紐で飾つた黄金の冠や、賞牌や、記念の額などを鑲めた壁を悲しく見せるやうにした。その華やかな晴れがましい遺物は寛大にも報酬として細君へ残したのだが、細君はそれ等をわが幸福の墓の裝飾として保存してゐた。

二人が入るや否や、書齋の扉が開いて、ド・ポッテ夫人が現はれた。

「ギユスタヴさんですね？」

彼女は夫を一人だと思つたが、知らぬ顔も見えたので、いかにも不安らしく佇んだ。凝つた着附で、淑かな彼女は、その胸像よりも一層垢脱けて見えた。そしてその優しげな顔は、神経質的な斷乎した決心を湛へた顔に變つてゐた。世間ではこの細君の性格について意見が區々であつた。或者は彼女が夫の大びらな侮辱を、夫が妾を置いてゐるのは知れ渡つてゐるのに、それを忍んでゐることを非難した。又或者は正反對に、彼女が黙々と天命に委してゐる態度を賞揚した。そして一般の意見では、彼女は何よりも安靜すぎな溫和な人間なので、その寡婦暮らしの十分なる報酬を、美しい子の愛撫や大人物の名を我が夫として所有する喜びのうちに發見してゐるのだ、といふことになつてゐた。

で、音楽家が同伴者を紹介して、それから家族と食事を共にすることを逃れる爲めにいゝ加減な虚偽を並べてゐる間、女はその若々しい顔を頼はせ、眼を据ゑて、何も見ず何も聞かず、恰もたゞ苦痛にばかり氣をとられてゐるやうだつたので、彼女はどうか人前を取繕つてはゐるものゝ、その下に大いなる憂苦が明かに潜んでゐる事實をジャンは察することが出来た。彼女はさうとは信じないが

らも夫の話を頷いてゐるやうであつた。そしてたゞ優しくかう言ふだけで満足した。
 「レイモンが泣くでせうよ。あの子の寢臺の傍であたし達が御飯をたべませうなんて約束しましたからね。」

「あの子はどうだい？」と、ド・ポッテは外の事を考へながら、いら／＼して訊いた。

「いゝやうですけど、始終咳はします……行つて見て下さいませんか？」

彼は部屋を見廻はすやうな風をしながら、露の中で二言三言ぶつ／＼言つた。「今はいけない……大急ぎなんだ……六時に俱樂部で集會がある……」彼の避けようとしてゐるのは、彼女と二人ぎりになる事であつた。

「ぢや、さよなら。」と若い女は俄に和らいで、普通の顔色になつて言つた。恰も底までも石に妨げられた清水のやうに。彼女はお辭儀して姿を隠した。

「出かせせう！……」

ド・ポッテは解放されたので友を誘つた。ジャンは自分の前へ降りてゆく、英吉利仕立のしやんとした長外套に包まつてきちんと四角ばつた、この悲しげな耽溺者を視た。彼は恰も自分の女の變化蜥蜴を剝製しに持つて行つた時のやうにひどく感動してゐた。そして自分の病兒に接吻もせず出てゆくのであつた。

「これは皆、君、」と音楽者は友の考へてゐる事を答へるらしく言つた。「わたしを結婚させた人達の

失策です。實に有難いお世話をして下さつた譯ですよ、わたしにとつても亦あの不惑な家内にとつてもね！……わたしを夫にしたり父親にしたりしようてえのは、随分馬鹿げてるぢやありませんか……わたしはロオザの戀人でさあ。今だつてさうなんです。どつちか一人斃るまではそれで續くんではせうよ……夙くから身を持ち崩して、それがすっかり浸み込み込んでしまつてる者が、どうして身を抜くことが出来ませう……君は確かにファンニイが承知したと思つてゐるんですか……」彼は通り過ぎる空馬車を呼んで、それへ乗りながら、

「ファンニイと言へば、君は知つてますかね？……フラマンが赦されて、マザから出ましたよ……デシュレットの請願でね……デシュレットは氣の毒ですな！ 然し死んだ後までも善い事をしたわけですよ。」

瓦斯の點いた小暗い通を全速力で轉がってゆく車輪を、狂氣のやうに駈けて行つて、引戻したいやうに思ひながら、ジャンは自らひどく感動したのに氣がついて驚きつゝも、身動き一つしないであつた。

「フラマンが赦された……マザから出た……」彼はこの言葉を小聲で繰返した。その言葉のうちには、ファンニイが四五日來、沈黙した理由が潜んでゐるやうに思はれた。そして俄かに悲歎をやめて、自分を慰めてくれる者の抱擁のうちへ投じたやうにも考へられた。といふのは、かの不運な男が自由の身となると、一番最初に思ふのは彼女の事であつたに違ひないから。

彼は牢屋の消印ある戀の通信を想ひ出した、又他の人々をあれほど安價に取扱ひながら、その男ばかりの肩を持つた女の執拗さをも想ひ出した。そして理窟の上では、偶然にもいろ／＼な不安や悔恨か

ら免れたわけだから、それを喜びさうなものだが、彼は言ひやうのない苦悶に責められて、熱が出て、夜はいゝ加減、眠られなかつた。なぜであらう？ 彼はもう女を愛してゐなかつた。が、たゞあの女の手に残つた自分の手紙が氣になつた。女はその手紙を多分あの男に讀んできかせ、他日又誰か性質の良くない奴に唆かされて、自分の安らかな幸福を亂す道具に使はないとは限るまい……

それが眞の動機であつたか、それとも表面だけの口實であつたか、自分でもそれと氣が附かない或種の懸念を下心に持つて——彼は手紙のみに氣をとられ、いつも頑固に斷つてゐたシャギール行きを輕々しく決定した。かういふ祕密な、デリケートな使を誰に委託されようぞ？……二月の或る朝、彼は十時の列車に乗つた。氣も心も、まことに穩やかだつたけれど、たゞ若しや家は閉ざされて、女は無頼漢の跡を追つてゐなくなつてゐはせぬかといふ心配ばかりがあつた。

線路の曲り角から別莊建の窓の開いた鎧戸や窓掛が見えたので、彼は安堵した。そして暗い中を後方へ點々と遠のいてゆく燈光を見た時の心持を想ひ出しながら、自分が馬鹿らしくなり、自分の脆い刺戟がわれながら嘲られた。彼はもう其處を通り過ぎた人間と同じ人間でなくなつてゐた。恐らく女も亦同じではなくなつてゐるであらう。しかもたゞ二月より経たぬのであつた。線路に沿つた森にはまだ新芽が出なかつた。別離の日同様、女の叫喚を反響した時同様、黴びたまゝ腐つたまゝであつた。

彼はたゞ一人浸み徹るやうな冷たい霧を通して停車場へ降り、踏み堅められた雪の上をすべりつゝ村の小徑を行つて、線路の弓門を潜り、パゼ・デ・ガルドの前まで人つ子一人に出會はなかつた。が、

その曲り角で一人の男と子供とが現はれた。その後について、停車場の運搬夫が行李を積んだ二輪車を押して行つた。

子供はすつかり襟巻に裹まれて耳まで帽子を被つてゐたが、彼の傍を通りすぎさま、聲を出さうとしてそれを噛み殺してしまつた。「ジョセフだ……」と彼は心に叫んで、その子供の恩知らずをやゝ驚きもし悲しくも思つた。そして振り返りながら、子供の手を引いた男の眼と、はたと出會つた。閉ぢ籠められてゐた爲めに青白い利潑さうな花車な顔、昨日買った出來合ひの着物、極く短く刈り込んだブルンドの髭、その髭はマザを出て、まだ日が経たぬ事を語つてゐた……確かにフラマンである！ としてジョセフは彼の子であつた……

この考へは、電光の如く彼の心に閃めいた。彼はまたあらゆる事を想ひ出して、その意味を悉く了解した。この美男の鑄金家が田舎にゐる子供を、女に委託した手紙のことから、不思議にも子供が來たこと、養子の件についてエッテマが言ひ漣つた顔付、オラムプとファンニイとの眼付などまで思ひ合せて見ると、偽造者の子供を養はせたのはお互ひに承知の上だつたのだ。あゝ、自分は實に大馬鹿者であつた。さぞ彼等は笑つてゐた事であらう！……恥かしい一切の過去が、厭でたまらなくなつた。遠いところへ逃げてゆきたくなつた。けれども又さまざまの事が彼を苦しめるので、その事を突き留めたくも思つた。男と子供とは出て行つて女だけがなぜ行かないのであらう？ それから手紙だ。手紙を取上げなければならなかつた。そんな汚はしい不吉なところへ手紙などは残して置くべきでなか

つた。

「奥様……旦那様がお出でになりましたよ……」

——どの旦那様だい？……」寢所の奥で、あからさまに尋ねる聲がした。

「わたしだ……」

すると、叫び聲がして、慌て、跳び起きる氣配がして、「お待ちなさい……あたし、起きるから……今ゆきますから……」

正午すぎなのにまだ寢床にゐる！ ジャンはその意味を推した。この疲れきつた翌朝の原因を知つてゐた。そして馴染の小道具のある食堂で待つ間、上り列車の汽笛や、隣りの小庭の山羊が頓へながらメエとなく聲や、食卓の上へ取散らした食器類が、彼に過ぎし日の朝々や、出発前の忙しい食事などを想ひ起さした。

ファンニイは彼へとびつくやうに入つて来たが、冷やかな男の前に立ちどまつて、二人は暫時驚いたやうに躊躇してゐた。恰もお互ひの親しみが途絶えた後、壊れた橋の両側に立つて、遙かに岸と岸とを望み合ひ、そしてその間には逆巻く大波の大きな間隙が横たはつてゐる時のやうな思ひがあつた。「今日は……」と女は身動きもせずに低い聲で言つた。

彼女は男の青白く變つた姿に氣がついた。男は女が再び若返つたのに驚いた。思つてゐたほどでは

ないが、たゞ少々肥つて、鮮やかな芝生を見るやうな軟かみのある色彩や眼の光の、その特別な輝きに包まれて、かの夜毎、ひしとばかりに彼を抱きしめさせた頃の姿そのまゝであつた。その時彼女はまだ森の下の落葉に埋まつた窪地の底にゐるやうであつた。それを想ひ出すと可憐さうで彼は心苦しくなつた。

「田舎にゐる人は起きるのが晚いんだね……」と、彼は皮肉な調子で言つた。

彼女は頭痛がするのだと言ひわけをしたが、お前さんと言つていゝか、あなたと言つていゝかわからぬので、男と同じやうに中性の形式を用ひて言つた。で、食事をした跡について男が不審を抱く様子なので、「これはあの子です……今朝出かける前にそこで食べたんですわ……」

——出かけるつて？ どこへ？」

彼は頗る平氣を装つたつもりで言つたが、その眼付は心の中を白狀した。と、ファンニイが、「あの子の父親が見えたのです……その人がつれて行つたのです……」

——マザから出て来てね？」

女は慄へたが、虚偽はつかかなかつた。

「さうですとも……あたしは約束をしたのです。そしてその約束を果したのです……幾度もあたしは申上げようとしたんですけれど、あなたはきつとあの子を還してしまふだらうと思つて、それで言はなかつたのです……」そして、おづ／＼言ひ足した。「あなたは随分嫉妬やきでしたからね……」

彼は冷笑した。彼たるものが囚徒風情に嫉妬する……ばかな！……と腹が立つて来たので、その事は手早く切上げて、自分の来た理由をてきばきと言つてのけた。手紙！……彼女はなぜセゼエルに手紙を渡さなかつたのであるか。渡してさへくれたら、こんな厭な會合はしなくてもすんだであらう。「全くです。」と女は依然として物柔らかに言つた。「あたしはお返し、ようと思つてゐたのです。あすこにありますよ……」

彼は女について寢室へ行つたが、慌てゝ二つの枕を蔽うた亂雑な寢床を見た。そして煙草を吸つた後の匂ひがした。その匂ひは女の化粧の薫りといりまじつて、テーブルの上に置かれた眞珠の小匣と共に彼には覚えがあつた。と、二人の心に同じ考へが浮んだ。「これはもう重かありません。」と女は匣をあげながら言つた……「あたし達はもう火事を起す心配なぞありませんわ……」

彼は口が乾いて、はつと押し黙り、その取散らした寢床へ近寄るのが躊躇された。女は寢床の前で首を傾け、撚れあがつた髪の毛の下へしつかりした白い頸窩を見せ、羊毛の着物をひらくとさせ、肥つた軟かな腰を投げ出しながら、讀みじまひとして、その手紙を翻へしてゐた……

「さあ……そこに皆なありますよ。」

その束を取つて、手早く衣囊へ入れると、今度は別な事が氣になつて来たので、ジャンは訊ねた。

「するとあの男は子供を連れてつたのだね？……で、どこへ行つたのだい？……」

——モルヅンよ。自分の國へ行つて隠れて彫刻をするのです。そして匿名で出来た物を巴里へ送る

のだと言つてました。

——そしてお前は？……こゝにゐるつもりかね？……」

女はこゝにゐるのは辛いと口籠りながら、男から逃れるやうに眼を外向けた。彼女は考へた……自分も赤間もなく去るであらう……一寸旅へ出かけるであらう。

「モルヅンへ行くにきまつてるさ……家庭を拵へにね！……」と、嫉妬の腹立ちをさらけ出して、「あの泥棒と一緒にゐつて、世帯をもつ積りだと云つたらどうだい……長い間お前はさうしようと思つてゐたのだ……行くがいととも。古巣へ歸るさ……女郎と偽造者とは一緒に暮らすさ。泥の中からお前を救ひ上げてやらうとは思つたんだがね。」

女は垂れた睫毛の間から勝ち誇つたやうな光をちら／＼洩しながら、ぢつと押し黙つてゐた。男が猛烈に反語を浴びせかければかけるほど、女は益々得意さうで口の端をぶる／＼と顫はした。彼は今自分と一緒にだつた時の幸福について喋つた。若くて且潔白な戀について、たゞその戀についてのみ語つた。あゝ！ 潔白な女の心ぐらゐ軟かに眠れる枕があらうか……やがて不意に聲を低くして、恰も恥づるやうに、

「私はお前のフラマンといふのに逢つて来た。あの男はゆうべ此處で寢たんだらう？」

——えゝ、晩かつたのよ。それに雪が降つたんですものね……あたし達は安樂椅子の上へあの人の寢床をこさへてやつたわ。

——嘘をいふな、此處へ寝たんだ……その寢臺を見ればわかる。お前を見ればわかる。

——その後でね。」と、女は自分の顔を男の顔へ近寄せて、放逸な焰を灰色の大きな眼のうちへ輝かしながら……「あなたが入らつしやる事をあたし、知らなかつたんですわ……あなたが失ってから、あたしはどうして寝られるでせう？ あたしは悲しかつたのよ、一人ぼつちで、そりやたまらなかつたのよ……」

——それで淫賣か……潔白な男と一緒に暮らしてゐた時から……そりやお前に適してたんだ、さうさ……そんな眞似をしないぢやゐられないやうにお前は出来てたのさ……穢はしい！ チョツ……」女は打たれても避けなかつた。顔中を差向けて打たれるまゝになつた。それから苦しいやうな、嬉しいやうな、勝ち誇るやうな、低い呻き聲をあげて、男へ跳びつき、腕一杯に彼を抱きすくめた。「あなたや、あなたや……あなたはまだあたしを愛してゐるわ……」

夕暮ちかく急行列車の通りすぎる凄じい物音で彼はふと眼をさました。そして眼を開けたまゝ、暫く正氣を失つたやうになつて、その大きな寢臺の底にぼつねんとしてゐたが、何だか過度に歩いた爲めに四肢五體がほぐれて、接合力もなく弾力もなく、別々に置き並べられてあるやうな氣がした。午後、盛んに雪が降つた。沙漠の如き寂寞のうちに、硝子窓に沿うて、壁に傳はつて、溶ける音、流れる音がきこえた。屋根組から又時々爐のユオクスの火の上へ泥水が迸しつて、ぼたり／＼雫の落ちる

音もした。

彼はどこにゐるのだ？ そこで何をしたのだ？ 小庭から反射する光のうちに、下の方から照され初めて、寢室は眞白に見えた。ファンニイの大きな肖像が彼の面前に立つてゐた。と、墮ちる處迄墮ちてしまつたといふ記憶が浮んで來たが、彼は少しも驚きはしなかつた。この部屋へ入つて、この寢臺の前へ來ると、忽ち捉はれて、譯がわからなくなつてしまつた。この敷布がまるで深淵のやうに彼を引入れた。彼は自思つた。「もし、そこへ落ちたら、永久に免されるわけにはゆかなからう。」ところが落ちてしまつたのだ。そして自分の卑屈は悲しく不快に思ひながら、もうこの泥中から出られないだらうと思ふと何となく慰められるやうなものがあつた。創を蒙つたものゝ憐れむべき氣安さがあつた、その人は血を失ひつゝ、創を引き摺りつゝ、糞土の上に横たはつてそこで死ぬのである。苦悶に疲れ、格闘に疲れ、あらゆる血脈は悉く開き、たゞうつとりと蒸臭い微温のうちへ沈むのである。

今、彼の身にふり掛つて來るのは恐るべき事であつた。又甚だ單純な事でもあつた。かういふ裏切をした後で、イレエヌへ歸れようか？ ド・ポッテ式の際どい家庭を営むのか？……たとへ墮落はしても、彼はまだそこまでは到らなかつた……ブシユロオへ手紙を書かうかと彼は思つた。意志の病氣について率先して研究し記述したあの大生理學者へ、この恐ろしい症状を附託しようかと思つた。即ちあの女とはじめて會つた時、腕の上へその手を置かれて以來、今日、十分なる幸福と十分なる歡喜との力によつて、その女から脱れ得たと信じながら、かく再び過去の魔力に捉はれてしまつた身の上を

報告しようかと思つた。その恐るべき過去にはもう殆んど愛情の片影すらもないのだ。たゞ骨髓に穿入した卑劣な習慣と不徳とがあるばかりなのだ……

戸が開いた。ファンニイは男の目をさまさないやうにと、そつと寢室の中を歩いた。彼は眼瞼を閉ぢたまゝ女に注意した。女は元氣よくてきばきと若々しく、庭の雪に濡れた足を爐で暖めながら、朝、争つた時に見せたやうな微笑を時々彼の方へ投げた。彼女は例の場所へ置いたメリイランド(煙草の名)の包みを取りに来たのであつた。で、シガレットを巻いて出てゆかうとすると、男は彼女を引留めた。

「あなたは睡つちやゐないの？」

「……いや……そこへお坐り……ちと話さうぢやないか。」

女は寢臺の縁へ居住つたが、男がひどく生眞面目なのでやゝ驚いた。

「ファンニイ……一緒に出發しようぢやないか。」

彼女は最初男が自分を試みる爲めに揶揄ふのだと思つた。が、詳しい話を聞いて見ると、それは冗談でなかつたといふ事がすぐわかつた。アリカに空いてゐる地位があつた。彼はそれを求めるつもりだ。二週間のうちには定まるだらうから、今のうちに行李の用意をして置かねばならぬ。……

「で、結婚はどうなさるの？」

「……そんな事はもう言はないで……わたしのした事は取返しがつかない……駄目なのは分つてる。」

わたしはもうお前から離れるわけにはゆかないのだ。

「……お可哀さうにね。」と、女は稍輕蔑するやうな調子で、優しく慫れつぽく言つた。やがて二三服煙草を吸つて、

「そこは遠いの、今仰しやつたお國よ？」

「……アリカかね？……非常に遠いよ、祕露だ……」と小聲になり、「フラマンもそこ迄は一緒にゆけないだらう……」

女は煙草の雲のうちにまじ／＼と考へ込んでゐた。男は女の手をとつて、その裸の腕を撫でまはした。そしてこの小家の周囲をほたり／＼落ちる雫の音を聞きながら、眼をとちて次第々々に泥中へ沈んで行つた。

一五

出帆を待つすべての人々の如く既に旅に出たやうな氣持で、蒸氣の下をいら／＼と心忙しく、ジャンはマルセイユへ来て二日になる。そこでファンニイが一緒になり、彼と共に乗船する筈である。何もかも準備が出来てゐる。アリカの副領事が嫂と共に出發するといふので、一等船室が二つ申込まれてゐる。で、彼は宿の寢室の赤色の褪めた石床を大跨で歩きながら、女と出帆とを焦れつたさうに待つてゐる。

外へ出る気がしないので、宿屋の中を歩いたり動いたりしなければならぬ。罪人か失業者のやうに町中は彼には窮屈である。うよ／＼と外國人の寄り集つたマルセイユの町だが、角を曲るたびに父や老ブシネロオに出會し、肩の上へ手を置かれたまゝ連れ歸られるやうな心持がする。

彼は閉ぢ籠つて、部屋で食事をし、旅館の共同食事へは降りてゆかず、讀む氣もない書物を讀み、蠅のたかつた壁上の『ペルムズの難船』『船長クックの死』などで、別にいつとは定つてゐない午睡時をこまかし、又漁船の帆のやうに補綴のあつた黄ろい日蔽にかくれて、蟲の食つた木の欄干へ何時間も寄りかゝる。

——若きアナカルシスの宿——彼がファンニイと會ふ所を相談した時、商業年鑑を走り讀みしてこの名を擇んだものだが、立派でも清潔でもないけれど、港に臨んで、海や出船入船が悉く見える古風な宿屋である。

窓の下では鳥屋が野天へ陳列した。達磨鸚哥や印度鸚鵡や鳥禽などが、たえず優しげに囀り、その重つた籠の聲が若葉の森の聲々と朝日に呼應する。と、日の昇るにつれて、ノオトル・ダム・ド・ラ・ガルドの大釣鐘に時を區切らるゝ港の労働の物音に、その聲が壓倒されてしまふ。

あらゆる國語の罵り聲、船乗り、擔夫、貝賣商人などの叫びごゑ、それに入り亂れて、修繕船渠の鐵鎚を打つ音、ぎり／＼いふ大起重機、敷石の上へ飛び返る提秤の衝突ふ響、甲板の時鐘、機關の汽笛、唧筒の絞車の拍子づいた響、排出する艙水、噴き出す蒸氣、さういふあらゆる物音が近海の傳響

板に重り合つて反響する。その近海からは遙かに皺喰れた呻き聲が起る。それは沖へ乗り出す大西洋航海の大海獣が吐く氣息である。

又さまざまの匂ひが遠い國々を暗示する。此處よりは一層熱い、一層日の輝く埠頭を暗示する。荷卸しをする檀香木、蘇芳木、檸檬、橙、阿月渾子、蠶豆、落花生。

その澁い香が漂つて、外國的の渦巻く塵埃と共に、鹹水、燒草、クック・ハウスの燻ぶる脂肪などと飽和した大氣のうちへ立ち騰つてゐる。

夜が来ると、この喧噪は静まり、濃い空氣は地に落ちて消散する。と、ジャンは暗くなつたのに安堵して、日蔽を掲げ、ぼんやりと交叉する橋や帆架や船首の斜檣の下で黒く睡つた港を眺める。この時沈黙を破るものはたゞ櫂の波間を滑る音と、遠く／＼海上へ甲板の犬が遠吠する聲ばかりである。ブラニエの燈臺は影を劈いて廻轉しながら、紅く又白い焰を長々と投げて、電光の閃くやうに島や要塞や岩の影法師を映し出す。水平線上無数の生活を導きつゝあるこの光輝は、風聲に、満潮の大濤に、灣の諸處からたえず吹き鳴らす小蒸汽の皺喰れた喊聲に、彼を誘ひ、彼を咬かして、いつも航海といふ事を彼に想ひ起させる。

まだ二十四時間待たなければならぬ。ファンニイは日曜日まで来ないのだ。彼女と會ふには早すぎたこの三日間を、彼は親族の側で、愛すべき人々の側で過ごすべきであつた。その人達を五六年見ぬ

であらう。或はもはや再會せぬであらう。けれどもカストレエへ着いた晩、彼の父が結婚を破つた事を知り、又その原因をも察した時、恐ろしい烈しい辯明を試みた。

我々は何であらう。我等の心に最も懐しい我等の愛情とは何であらう。同肉同血の二箇の生物の間にも、一度憤怒が通過すれば、さしにも深く細やかに根ざした自然の情たる彼等の慈愛は、引拔かれ、歪められ、いづくへか運び去られてしまふのである。そして、その盲目的の抗すべからざる猛烈さは、さながら支那海の大颶風に似て、いかなる氣丈の水夫もそれを想ひ出すことすら憚り、青くなつて、「そのことは言つてくれるな……」と云ふくらゐな勢ひである。

彼もその事は決して言はぬであらう。が、かの幸福な幼時を送つたカストレエの露臺の上で、華やかに静かなあの地平線を前にして、又ぢつと密生しながら、父の呪咀を浴びて慄へた。あの松、あのミルト、あの扁柏の林を前にして、あの恐ろしい活劇を演じた事は、終生思ひ出さるゝであらう。彼はいつまでもあの丈の高い老人の姿を忘れないであらう。その頬をぶるゝと顫はしつゝ、その憎悪の口、その憎悪の眼を以て彼の方へ歩みより、假借せざる言葉を吐き、「行け。その乞食奴と一緒に立て。我々にとつては貴様は死んだものぢや……」と、彼を家からも名譽からも放逐した、あの劍幕をば忘れないであらう。また泣きながら階段の上に跪いて、長兄の爲めに容赦を願つた幼い雙生兒、見向きもせず、別れも告げぬデイダヌの蒼白い顔、それから硝子窓のうしろの高いところで、優しい心配さうな病人の年老つた顔付が、その騒動の理由やら、接吻もせずにジャンがそゝくさとして出てゆく譯を

聞きたさうであつた。

母親を接吻しなかつたといふ考へが、彼をアギニオンへの半途から引返させた。彼はその地方の低いところで、セゼエルと馬車とを見棄て、泥棒の如く間道を抜け、果樹園を潜りカストレエへ忍び込んだ。夜は暗かつた。朽ちた葡萄蔓が足に絡まつた。たうとう方角がわからなくなり、自分の家を闇の中に探しながら、何だかもうあかの他人のやうであつた。と、粗塗の白壁が壁に反射したので、それに跟いて行つた。が、階段の戸口が閉つて、どの窓も暗かつた。鐘を鳴らさうか？ 敲かうか？ 父が畏くて彼はその氣になれなかつた。締りの悪い雨戸でもあるか知らんと、二度三度母家を廻つて見た。どこもかしこも毎晩の通りデイダヌの提燈が見廻つてゐた。そこで母の寢室を長い間見成つた後、自分を入れまいとする幼時の家へ、心かぎりの別れを告げて、彼は最早身から離れぬやうになつて了つた悔恨の情を抱きながら、快々として立去つたのである。

當り前なら、この永い不在の爲めに、この波風の危険を冒す航海の爲めに、愈々乗船する際まで、親戚朋友が別れを惜しむのである。人々は最後の日を一緒に暮らして、いつそ行を共にしたいなどと、出發する人の船を訪れ、船室を訪れるものである。ジャンは日に何度となく、かうした優しい見送人が、時としては大勢で賑かに、旅宿の前を通り過ぎる有様を見た。殊に心を動かされたのは彼より劣つた部屋にある家族的の一組である。老爺が一人、老婆が一人、羅紗と黄ろいカンブレエの胴衣を着た氣樂

らしい田舎の人達で、その息子に隨いて來たのだが、船の出帆するまで、何かと彼の世話をする。そして待つ間の退屈まぎれに、窓へ靠れて、その水夫を間へ挟みながら、三人が腕と腕とをいつかと組合つてゐる。彼等は物も言はずに抱き合ふのであつた。

ジャンはそれを見やりながら、自分もどんなに美しい出發が出來たであらうにと考へる……彼の父、幼い妹達、それから頼へる軟かな手で彼に寄り添ふ母、その手は恰も沖へ向ふ船首の帆桁のやうに潑刺たる精神と冒險的の元氣とを吹き込んでくれた手であつた……無益な悔恨である。罪は犯してしまつたのだ。わが運命は鐵軌の上に横たはつてゐるのだ。彼はたゞ出發するのみである。忘れるのみである……

最後の夜の時間が經つのを、いかに遅く、いかに残酷に彼には思はれたらう！ 彼は宿屋の寢臺の上で幾度も寢返りを打つた。そして黒色から鼠色に、やがて曙の白色に、ぢり／＼と變りゆく硝子窓の日を待つた。その曙を縫つて燈臺が紅い光輝を散らしてゐるが、それも朝日と共に消えてしまつた。

その時分になつてから彼は睡つた。ふと寢室に日がさし込んだので目をさます。と鳥屋の籠の入り亂れた啼聲につれて、マルセイユの日曜日の鐘の音が無數に入れ亂れてきこえ、橋には小旗が靡き、すべての機關が休んだので、廣々した埠頭々々へその音が反響した……もう十時である！ 巴里の急行列車は正午に着く。彼は女を迎へる爲めに手早く着物を着る。二人は海に面して朝食を食べよう。

と、そのうちに荷物が甲板へ運ばれるであらう。そして五時には出帆だ。

素晴らしい日である。底深い空には鷗が白く點々と飛ぶ。海の色は一層濃く碧く、鑛物にあるやうな碧さで、その上の水平線には帆が見える、烟が見える、何もかも見える、何もかも映る、何もかも跳つてゐる。この大氣と水との透明な赫かしい岸邊にはいかにも自然の歌らしく、宿の硝子窓の下で豎琴が響く。神々しいまで坦らかな伊太利調だが、絃上を走るその音律は痛ましく人の神経を咬る。これは音楽以上である。南國の歡び、涙に溢るゝ生と戀との満足、これはその翼ある翻譯である。するとその泣くが如くうち頼へる旋律のうちへイレエヌの思ひ出が浮んで來る。あゝ、遠い……あゝ、美しい國は消えた！ あゝたゞ取返し難く碎けた物の永い／＼悔恨のみ！

さらばよ！

出てゆく時、闕の上で、彼はガルソンと出會した。「領事殿へお手紙が參つてをります……今朝、着いたのでありますが、領事殿はよくお眠みになつてお出でした！」『若きアナカルシス』の宿では、地位ある旅人はめづらしいので、善良なるマルセイユ人は、何かにつけてその客人の肩書と呼ぶのである……誰が手紙などよこされよう？ 彼の居所を知る者はないから、少くともファンニイの外には……で、その封筒をちつと視て、彼は吃驚した。彼は了解したのである。

『さてとや、妾は参りかね候。あまりに愚かしき事に候ゆゑ、妾は實行いたし難く候。憐れなるわが友よ、かゝる事は若き時代に限り候。妾はもはや、若き身にては無之候。又盲目的の狂熱が必要に候へども、妾達は御同様に狂熱は無之候。五年間の樂しかりし日を思へば、貴方の仰せに従ひて、妾は世界の他の岸へお伴いたすべき筈に候。そはこの上なく貴方を愛する妾に候へばなり。妾のもてる物は悉く貴方に獻げつくし候。さてお別れ致さねばかなはぬやうに相成候時、妾の苦しみはいかばかりに候ひしぞ。何人と別れし時もその時の如く苦しき覺えは嘗て無之候ひしよ。さりながら、かゝる戀は、かやうにして消えゆくものに候……そのやうにお美しく、そのやうにお若きお身を思へば！ いつまでも生々とうち顫へて、知らず識らずお衛り遊ばさるゝ事のさはあるを思へば……妾には今もはやさうした事はなかるべく候。貴方によりて妾は生を樂しみすぎ候。また苦しみすぎ候。妾は力盡き候。

『かゝる境涯にありて、さういふ大旅行、さういふ移住など思ふばかりにても恐しく候。平生動く事を好まず、サン・ジェルマンより遠くへは更に参りたる覺えもなき妾をばお考へ下されたく候。又女子は太陽が近づけば俄に年老るものに候。貴方が未だ三十歳にもなり給はぬうちに、妾はマン・ピラアの如く黄ろく皺みはて候べし。一たびは、貴方も犠牲となりたる事を後悔遊ばさるゝ日有之候はむ。憐れなるファンニイはその時全世界に復讐せらるべく候。昔、東洋に或邦有之候。これは貴方の世界漫遊誌にて讀みたる譚に候。その邦にては、妻若しその夫を欺けば、生々しき獸の皮のうちへ生きながら猫

と共に縫ひ込まるゝ由に候。やがてその袋は海濱へ抛棄てられ、日に焼きつけられて泣き叫びつゝ轉げまはる由に候。女が泣けば、猫は引掻き、身の毛もよだつ格闘のために皮は皺み縮まり、最後の呻き聲して、遂に袋の動かずなるまで、女と猫とは咬みあふ由に候。これは妾達の共々蒙るべき刑罰に近き物語に候……』

壓倒されて呆然として、彼は一寸讀みさした。見渡すかぎり海は碧くきら／＼と光つた。

Addio……堅琴が鳴つて、その響の如く熱い／＼激切な聲がそれに伴つて唱つた……Addio……破壊されて、荒されて、たゞ滓と涙ばかりになつた空虚な彼の生涯は、恰も圃を刈つて收穫を得ながら、還る希望を失つたやうなものであつた。自分を避けた女の爲めに……

『この事は夙に申上ぐべき筈には候ひしかど、貴方があのやうに熱せられて、確き決心を示され候ま、申しそびれたるわけに候ひし。貴方の高き熱情は、妾の心を奪ひて、女としての誇りをば妾に覺えさせ申候。一旦別れし後にて再び貴方を得たる自然の誇りに候。されどわれとわが心の底にては、さる事はもはやなし、こは終りなり、破れたるなりとのみ感じ居候。貴方は何をか望み給ふ？ かゝる激動を受けたる後にて……又この事のかの不幸なるフラマンの爲めなりなどとはお考へ遊ばすなよ。かの人に対して、貴方及びその他の人々に對すると同様、妾の心は死にはてたるに候。さりながら、こゝにかの子供の残り候爲め、妾はどうしてもそれとは離れがたく、又それに絆されて、父親の側へ

も参るやうに相成候。誠に憐れなる方にて、戀の爲めに一生を誤りながら、マザより歸りても尙初めて會ひし日と同じく熱烈にて且つ慈悲深く候。いつぞや再びお目にかゝりし際など、そのお方は夜もすがら妾の肩の上にて泣きつゞけられたるわけに候。それにてお判じ下されたく候。又いかにしても貴方に顔向けのならざりし事は御存じに候はむ……

『愛するわが友よ。申上げし通り、妾は愛しすぎたる爲めに破滅いたし候。今度は妾の番に候。妾は愛せらるべく候。護らるべく候。崇めらるべく候。慰めらるべく候。かのお方は妾の前にて跪き候べし。妾の皺をも白髪をも見る事など決して有之候まじ。かくてあの方の望まるゝ通り、結婚いたすとしても、恩を與ふるは妾の方に有之候。御比べ願はしく候……痴情めきし事は殊更に避け申候。妾は十分に用心いたし、貴方には再びお目も致すまじく候。この手紙を認め居候停車場なる小カフェヨリ、木々を横ぎりて、お互ひに楽しき時や、つれなき時を過ごしたる家が見え居候。又戸口に揺めく表札も見え居候が、それは新しき借主を待ち居候……貴方はいよゝ自由の御身に相成候。妾の噂をお聞き遊ばす時など、もはや決して有之まじく候……さよならよ。一番お終ひの接吻をしませう、頸の上へね……貴方や……』

——了——



オ フ サ

翻譯者

武林無想庵

發行者

佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十五日發行

(定價三十五錢)

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町七十一番地

電話牛込 八〇〇五番 八〇〇八番
八〇〇六番 八〇〇九番
振替東京 一七四二番

新潮文庫

郵送料
 ▼十五錢以下……二錢
 ▼三十五錢以下……四錢
 ▼五十五錢以下……六錢
 ▼六十五錢以下……八錢

藤島村崎	寬菊池	芥川龍之介	江戸乱歩	下村秋	島田次郎	多喜二	吉田二郎
小説家	小説勝	小説羅	小説パノラマ島奇談	小説天國の記録	小説地	小説蟹工船・不在地主	小説無
(上・下)		生門		街のペン	上(第一部 第二部)		
上234頁 下274頁 各30銭	420頁 45銭	162頁 20銭	146頁 20銭	200頁 25銭	(1) 302頁 35銭 (2) 354頁 45銭	246頁 30銭	456頁 55銭
喬吉松江	千雄葉	木村毅	相太郎隆	近藤浩一	近藤浩一	ゾラ	北原白秋
究研佛蘭西文學概観	究研現代世界文學概観	究研小説研究十二講	説解テクノクラシイ	漫畫坊っちゃん	漫畫吾輩は猫である	ナナ	白秋詩歌選
						(上・下)	
286頁 30銭	120頁 15銭	320頁 35銭	134頁 20銭	208頁 25銭	200頁 25銭	上368頁 40銭 下278頁 30銭	146頁 20銭

エツネルフゲ	トルイス	トルイス	ツエリトオ	イテマユ	山本三	吉川英治	芥川龍之介	久米雄正	吉田二郎
初恋	人生論	性慾論	サイラス・マアナー	モンテ・クリスト	小説風	小説雲霧閣魔帳	小説傀儡師	小説學生時代	小説無
192頁 25銭	174頁 20銭	120頁 15銭	296頁 35銭	(1.2.3)各45銭 (4.5.6)各50銭	458頁 55銭	218頁 30銭	216頁 30銭	360頁 45銭	456頁 55銭
藤島村崎	寬菊池	櫻井忠	生春	ハイネ	モロンオ	シビエヤク	ボツオカ	ルソオ	北原白秋
小説春	小説青春圖會	戰肉	詩集靈魂の秋	ハイネ詩集	夜ひらら	ハムレット	デカメロン(全三卷)	懺悔録(上下)	白秋詩歌選
294頁 40銭	290頁 40銭	210頁 30銭	250頁 35銭	200頁 30銭	196頁 30銭	204頁 30銭	(1) 55銭 (2) 50銭 (3) 50銭	上400頁 50銭 下566頁 60銭	146頁 20銭

忠櫻 温井	春生 月田	潤谷 一郎	有山 三本	白鳥 編	省吾 編	生中 田澤	森田 草平 他三氏著	高次 郎	スシ ビエ ヤク
戦記 戦はこれからだ	感想 眞實に生る惱み	小説 近代情痴集	戯曲 女人哀詞	大正 詩選	昭和 詩選	近代 思想十六講	近代 文藝十二講	日本 思想十六講	ジュ リア ス・シ ーザ ー
244頁 35銭	284頁 35銭	314頁 40銭	214頁 30銭	246頁 35銭	110頁 15銭	510頁 60銭	444頁 55銭	496頁 60銭	150頁 20銭
春生 月田	ツフ イブ リ	サド ライ	ダン テ	信吉 子屋	絃吉 二郎	ロバ ンイ	正久 保譯	キゴ イリ	ツバ ルク ザ
春月 小曲集	ビュ ビュ ドモ ンバ ルナ ス	ジエ ニー ゲル ハー ト	神曲 (上下)	小説 空の 彼方 へ	小説 人間 苦	バイ ロン 詩集	聖フ ラン シス の <small>小 き花</small>	どん 底	従妹 ベツ ト <small>(上 下)</small>
105頁 15銭	158頁 20銭	上35銭 下30銭	各350頁 各40銭	295頁 35銭	211頁 30銭	146頁 20銭	314頁 40銭	152頁 20銭	380頁 45銭

正久 雄米	やす 子宅	テハ イア	ゲエ テ	一岡 平本	三甲 郎賀	英吉 治川	武加 雄藤	武羅 夫村	中羅 夫村	原島 四浦
小説 破船	小説 偽れる未亡人	テス (上下)	ゲエ テ詩 集	漫文 人の 一生	小説 犯罪 發明 者	小説 貝殻 一平 (上下)	小説 久遠 の像	小説 蒼白 き薔 薇	小説 蒼白 き薔 薇	明治 詩歌 選
500頁 60銭	286頁 40銭	上398頁 50銭 下312頁 40銭	170頁 25銭	318頁 40銭	206頁 30銭	上430頁 55銭 下358頁 45銭	360頁 45銭	418頁 50銭	418頁 50銭	138頁 20銭
信吉 子屋	絃吉 二郎	フデ ニス	エフ ロル ベ	ドス トエ フス キイ	スシ ビエ ヤク	エツ ネル フゲ	白北 秋原	廣水 徳野	水野 徳野	四二 葉迷 亭
小説 海の 極み まで	感想 草光 る	椿姫	ボヴ リイ 夫人	白痴 (全四 卷)	ロミ オと ジュ リエ ット	父と 子	感想 雀の 生活	戦記 此一 戦	戦記 此一 戦	小説 平凡
460頁 60銭	270頁 35銭	344頁 45銭	512頁 60銭	(1) 45銭 (2) 45銭 (3) 35銭 (4) 35銭	174頁 25銭	362頁 45銭	228頁 35銭	244頁 35銭	244頁 35銭	148頁 15銭

トル イス	トル イス	エサ ルビ	信吉 子屋	エツ ネル フゲ	春生 月田	絃吉 二郎	絃吉 二郎	ンダ ーキ	ソロ オ
我 が 懺 悔	人 は 何 つ て よ 生 き る か	海 の 嘆 き	説小 空の 彼方 へ	散 文 詩	想感 影は 夢み る	説小 静 夜 曲	説小 人 間 苦	種 の 起 原 (上・下)	森 の 生 活
144頁 20銭	177頁 25銭	206頁 25銭	300頁 35銭	142頁 20銭	280頁 35銭	446頁 55銭	218頁 30銭	各350頁 各45銭	424頁 50銭
トル イス	フロ ンウ グ	川長 伸谷	政小 二郎 島	省白 吾鳥 譯	威平 馬野 雄譯	春生 月田	ツフ プリ	絃吉 二郎	有山 三本
幼 年・少 年	イ ヴン チェ リン	説小 直八 こども 旅	説小 海 燕	ホ イト マン 詩集	モ オパ ッサ ン選 集	想感 生命 の 道	四 つの 戀物 語	想感 木に 凭り て	曲戲 同志 の人 々
278頁 35銭	108頁 15銭	227頁 30銭	332頁 40銭	226頁 30銭	372頁 45銭	448頁 55銭	172頁 25銭	226頁 30銭	192頁 25銭

以下續々刊行



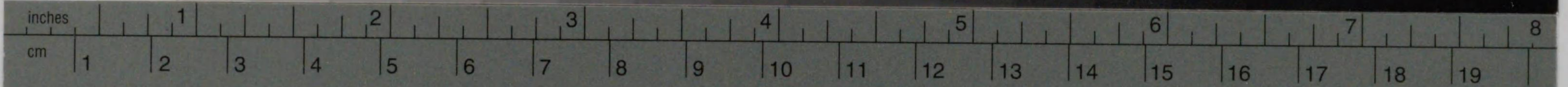
サ
35

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

